

「思いどおりにはならない」

ダニエル 11 : 5 - 19

Mach.14.2021

ダニエル 11 : 5 - 19 (パワポ)

Preface

先週の続きになります。

今、ダニエルに現れた天使ガブリエルは、紀元前 BC 6 世紀頃に生きたダニエルの没後、(ダニエルにとっては未来にあたる) 約 400 年間に渡って起こる中東世界、ヨーロッパ、アフリカ、アジアに至る世界の情勢と、その権力の変遷について教えてください。

先週見ました 2 - 4 節までの内容は、中東世界の覇者ペルシア帝国から、中東世界のみならず、ヨーロッパ、アフリカ、アジアにまで、その勢力を広げていったユーラシア大帝国ギリシアへの権力の変遷と、その崩壊についてでした。

そして、今日の聖書箇所 5 - 19 節までの内容は、崩壊したギリシア帝国が 4 つに分断され、その 4 つの領土の中でも、ひと際権勢を誇ったセレウコス王朝シリアとプトレマイオス王朝エジプトの熾烈な領土争い、権力争いの様相について記録しています。

ただ、その内容をよく観察しながら読んでいきますと、到底、権力や富や栄華や繁栄といったことには似つかわしくない言葉が並び、そして、似つかわしくない言葉をもって、結論付けられている皮肉が見えてきます。

最初は、権力というものに相応しいとても勢いのある言葉をもって始まるのですが、その最後は、全くもって権力の微塵も感じないような言葉で終わっています。

Part One

まず、5 節から見たいと思います。

ダニエル 11 : 5 (パワポ)

この 5 節の具体的な内容については後ほど見ていきますが、今はまず、ここに並べられている単語、言葉に注目したいと思います。

「強くなる」、「強くなり」、「権力よりも大きな権力をもって治める」という、正に権力に相応しい、勢いを感じる言葉をもって始まっています。なのにこれが、

12節に行きますと、この勢いが、何だかおかしいことになっています。

ダニエル11：12 (パワポ)

ここでは、「倒す」けれども、「勝利を得ることはない」という、何だかおかしい意味深な表現が記録されています。

「倒す」という言葉は、権力に相応する言葉でありますし、「倒した」んですから、勝利が付いてくることは当然ですが、「勝利を得ることはない」んです。

5節にあった勢いはどこへやら、“権力”の雲行きが怪しくなってきました。

そして、この雲行きが、19節を見ますと、全くもって期待とは裏腹なことになっています。

ダニエル書11：19 (パワポ)

「つまずき、倒れていなくなって」しまいました。

強くなり、強くなり、大きな権力をもって始まりましたが、倒しても勝利を得ることもなく、最後は、つまずき、倒れていなくなってしまいました。

竜頭蛇尾という、始めの竜の頭のような勢いはどこへやら、結局最後は、蛇の尻尾のように細々と終わってしまうという意味を表す言葉がありますが、今、この11章に書かれています、権力、富、栄華、繁栄の行く末は、竜頭蛇尾どころではありません。

蛇のような尻尾さえも残らず、「いなくなって」しまうんです。

何にも残らないんです。

無です。

先週の聖書箇所ではガブリエルは、「人はどこまで行っても、他者を傷つけずには生きることの出来ない罪人である」という真理を教えてくださいましたが、今日の聖書箇所では、「この世のあらゆる力は、無に帰する」という真理を教えてくださいます。

この世の権力も、富も、栄華も、繁栄も、力という力は、やがて無に帰する、いや始めから無に等しいということです。

Part Two

そして、さらに追い打ちをかけるかのような言葉が、17節にあります。

ダニエル11：17 (パワポ)

膨大な権力を所有する権力者が、自分の思っていることを思い通りにしたいと思い、持っている力を総動員しても、ものごと「思いどおりにはならない」んです。

人生を生きている人間ならば、誰もが、その人生思いどおりに生き、思い通りに回したいと願っています。

そして、出来る限り思い通りに生きるために、色んな力を得たいと願います。

知力、体力、学力、財力、支配力、先を見通す力、経験値、あらゆる力を少しでも、ほんの少しでも身に付けたいと願いますが、どの力を、どれだけ得たとしても、ものごと思い通りにはなりません。

これが、ダニエル書11章が私たちに教えてくれる大事な事実です。

そして、どんな力をもってしても、ものごと思い通りにならないというのもまた、神が人に定めた限界です。

世界史に名を残すような権力者中の権力者たちが、その力をどんな形で、どんなに総動員したところで、「彼らの思い通りにはならない」んです。

なぜならば、そもそも、どんな力も、結局突き詰めていくと“無”だからです。無に帰するからです。無に等しいからです。

じゃ、何に対して無に等しいのか？
すべてです。

神と人にとって大事なもの、すべてに対して無に等しいんです。
じゃ、神と人にとって大事なすべてって何でしょう？

愛です。
愛がすべてです。

先週のメッセージで、ギリシアのアレキサンダーに無かったものは、愛だとお話ししましたが、愛がないということは、すべての力を手に入れたアレキサンダー大王でも、実質、何も持っていなかったことになります。

逆に、愛があれば、すべてを手にしたことになります。

アレキサンダーだけでなく、アレキサンダー以後のすべての権力者たち、そして、「力には何かがある」という幻想を抱きながら、時間と歴史を重ね続けてき

た、私たちすべての人類にも言えることです。

愛がなければ力なんて無に等しいんです。(第一コリントに行ってみましょう)

コリント人へ手紙第一 13 : 2 - 14 : 1a 愛を追い求めなさい (パウロ)

神が最も大事にしておられるもの、そして、人にとって最も大事なものは、愛です。

もし、そこに愛がないならば、どんなものも、どんな力も無に帰します。

人生思い通りに生きるために、色んな力を付けることが重要なのではなく、思い通りに行かない人生にあって、どれだけ愛を目的に、愛を動力に生きられるのかが、勝負の分かれ目です。

試合に勝つとか、試験に受かるとか、有名になるとか、戦争に勝つとか、ヒット商品を生み出すとかという勝負ではなく、

神の愛に生かされ、どれだけ神の愛に生きようとしたのかという勝負の分かれ目です。

Part Three

有史以来これまで、数多の歴史的人物達が、いや、人間すべてが、その人生思いどおりに生きてみようと何らかの“力”を付けようと、歩んで参りました。

しかし、そのどの力をもってしても、「思いどおりになる」人生なんて、何ひとつどこにもありませんでした。

現代においても、私達庶民からすれば、「思いどおりになる人生を生きている」と思える人たちがいるかもしれませんが、その人たち誰ひとりとっても、「思いどおりにはならない人生」を生きています。

それでも、どこかに、思いどおりになる人生があるかのような幻想を抱きながら、私たちの社会は回り、人は生きているのかもしれませんが。

そんな世を生きている私たちに、天使ガブリエルは告げます。

「強くなり、強くなり、大きな権力をもって治め倒したとしても、そこに勝利はなく、思い通りに行くこともなく、やがて必ず、つまずき、倒れていなくなる」と。

つまり、世の中突き詰めていきますと、“無”を追いかけて力いっぱい回っている、幻想のような所だと言うのです。

力を尽くすのに、愛がなければ“無”だと言うのです。

Part Four

ダニエル書 11:5-19 に預言されている具体的な歴史的事実について、これから少し説明させていただきますが、その有り様には、全くもって愛がありません。

有るのは力だけです。

思いどおりに物事を動かそうとする力だけが、そこには存在します。

もう一度、5節を読んでみます。

ダニエル 11:5 (パワポ)

歴史の話なので、ちょっとややこしいですが、ついて来ていただけますと感謝です。

先週もお話ししましたように、このダニエル書 11 章では、シリアのセレウコス王朝のことを“北の王”と記し、エジプトのプトレマイオス王朝のことを“南の王”と記します。

なぜならば、イスラエルから見てシリアは北で、エジプトは南だからです。

そしてこの5節では、北の王シリアのセレウコス王朝を建てたセレウコスが、当初は、まだ力が弱く、南の王エジプトのプトレマイオス王朝を建てたプトレマイオスの配下のような存在でしたが、他国との戦いに勝った勢いで段々と力を付け、やがて、プトレマイオスから独立し、エジプトのプトレマイオス王朝を凌駕するシリア・セレウコス王朝を建てて行った経緯を記しています。

そして、6節に入りますと、同じく、“北の王” “南の王”と記されてはいますが、シリアもエジプトも代替わりして、セレウコスの孫アンティオコス2世と、プトレマイオスの息子プトレマイオス2世の政略結婚の話になります。

ダニエル 11:6 (パワポ)

シリアとエジプトは、旧ギリシア帝国の袂を分かってから、非常に仲が悪くなりました。

そこで、エジプトのプトレマイオス2世は、自分の娘ベレニケを、シリアのアンティオコス2世に嫁がせようとしています。

しかし、アンティオコス2世には、もうすでにラオディケという本妻がいまし

た。

なのに、この本妻ラオディケを追い出してしまい、プトレマイオス 2 世の娘ベレニケと結婚し、このベレニケを本妻にしてしまうんです。

でも、少し時間が経ちますと気が変わったのか、ラオディケを再び宮廷に招き入れます。

すると、このラオディケは、また追い出されたらたまったもんじゃないと、夫アンティオコス 2 世を毒殺し、ベレニケとその子供たちまで殺してしまいます。

そして、ラオディケはついに、自分の息子カリニクス（セレウコス 2 世）を、BC 246 年に王位に即位させました。

力を保ち、力を増大させ、その力をもって、思い通りに物事を運ぼうとして進めた政略結婚でしたが、とんでもない失敗に終わり、益になるものなんか何一つありませんでした。

残ったのは、以前よりも悪化したシリアとエジプトの関係だけです。

そんな中、黙っちゃいなかったのが、無残にも殺されてしまったベレニケの弟、南の王エジプトのプトレマイオス 3 世（ユエルゲテス）です。

姉ベレニケの復讐をするために、軍隊を率いてシリアに進撃し、セレウコス 2 世をコテンパンにします。

そして、とてつもない戦利品をエジプトに持ち帰ってきました。

その戦利品は、2500 体もの神々の像と、36,000 kg の金、現在のお金に換算しますと（660 万円 / kg）、8976 億円相当の金を持ち帰ったそうです。

しかし、今度は、この敗北に納得のいかない北の王シリアのセレウコス 2 世もまた、軍隊を率いて BC 242 年に南の王エジプトのプトレマイオス 3 世に攻撃を仕掛けますが、返り討ちに合い、ボロボロになってシリアに帰ってしまいました。

しかし、これでは終わりません。

今度は、シリアのセレウコス 2 世の息子たち、セレウコス 3 世とアンティオコス 3 世が協力して、南のエジプトに戦いを仕掛け、ひとまず勝ちます。

ただ、エジプトの代替わりをしたプトレマイオス 4 世は、国力を蓄え、再び反逆に出て、北の王シリアのアンティオコス 3 世を打ち破り、領土を取り返しました。

ここまでの、7 節から 11 節までの内容です。 ちょっと読んでみますね。

ダニエル 11 : 7 - 11 (パワポ)

Part Five

すみません。

ちょっとややこしい話でしたが、世代を超えて、全世代に渡って、結局力と力

をぶつけ、どっちも傷つき、疲弊し、どっちもどっちの状態です。

12節から19節までも、同じようなことが続き、ついに、つまずき、倒れていなくなります。

つまり、“無”に帰しました。

なぜなら、そこには愛はなく、あったのは力だけだったからです。

ただ、“力”と言いますと、「いや、私にはそんな力はありません。」と誰もが思ってしまうかもしれませんが、“力”という言葉が“攻撃性”という言葉に言い換えまると、ひと事ではなくなります。

私たちの力の問題は、その攻撃性にあります。

力は攻撃することをもって、表面化します。

つまり、力=攻撃性です。

人間誰もが攻撃性を兼ね備えており、その攻撃性を、時には巧妙に、時には過激に、時には穏やかに、また時には、一見すると分からないように裏で発揮します。

今、このダニエル書11章にある力の様相は、色んな攻撃性をもって、表面化しているのが良く分かります。

私たちの罪の本質的な問題のうちの 하나가、その攻撃性です。

罪を犯したばかりのアダムが真っ先にしたことは、妻のエバを攻撃することでした。

Part Six

しかし、第二のアダムであられるイエス様は、一切、攻撃はなさいません。

されたことと言えば、愛することだけです。

ありとあらゆる力を動員しながら攻撃し、不当な裁判にかけ、不当な死刑を宣告し、不当に十字架に架けた、権力者や律法学者や庶民やヘロデやピラトに対して、

死より復活されたイエス様は、「ほら見たことか！ このように実際に復活したぞ！ お前ら覚悟しろ！」なんていう風に反撃することもせず、死を打ち破る力を見せつけるようなことなんか、一切なさいませんでした。

なされたことは、微笑みながら、「シャローム、平和と平安があなたがたにあ

りますように」と言い、朝ご飯を自ら用意して弟子たちと一緒に食事を取り、共に散歩し、共に時間を過ごしたただけでした。

主イエス様は、無に帰する方でもなければ、何事をも無に帰させる方でもありません。

そして、その方法は、力を用い攻撃することではなく、愛することです。

イエス様の用いなさった、物事を無にせず、すべてを益に変える唯一の方法は愛することです。

そして仰います。

「あなたがたも愛し合いなさい。 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも愛し合いなさい。」

愛し合うことこそ完全な勝利であり、愛し合うことこそ恐れを除き、愛し合うことこそ物事に意味を持たせ、愛し合うことこそ朽ちることのない実りを実らせる唯一の方法です。

そして、その愛は、唯一の神であられる主イエス・キリストに帰属し、主イエス・キリストによって現れました。

ローマ人への手紙 8 : 37 - 39 (パウロ)

セレウコス 1 世も、2 世も、3 世も、アンティオコス 1 世も、2 世も、3 世も、プトレマイオス 1 世も、2 世も、3 世も、勝利を得ることはありませんでした。

すべてが敗北となってしまいました。

なぜなら、主イエス・キリストにある神の愛に、依らなかつたからです。

ヨハネの手紙第一 4 : 7 - 12, 16 - 21 (パウロ)

愛を知ろうとせず、愛を諦め、愛に生きず、愛を目的とせず、愛を動機とせず、愛を動力としないならば、

どんなに強くなり、強くなり、力を得て倒したとしても、思い通りに行くことがないのは当然、そこには勝利もなければ、必ずつまずき、倒れていなくなってしまう。

Conclusion

先週も少し触れましたが、イスラエルのカナンの地は、北のシリアと南のエジプトが戦う度に、巻き込まれ甚大な被害を受けました。

エジプトの支配下に陥ったり、シリアの支配下に陥ったりと、世界情勢に翻弄

され巻き込まれていきました。

ただ、そんな中であっても、彼らが決して勘違いをして、巻き込まれてはいけないことがありました。

それは、愛に生きるということです。

力に生きるのではなく、愛に生きるということを諦めてもならず、目を逸らしてもならなかったのに、力に生きる世の中と同じように、力に生きてみようかとしてしまった時がありました。

それが、ダニエル書 11 : 14 です。

ダニエル 11 : 14 (パワポ)

ここにある南の王エジプトのプトレマイオス 5 世は、7 歳で王に即位したがために、シリアを含めた周辺国家が色めきだって、エジプトを力でねじ伏せるのは、今だと立ち向かいますが、その中に、イスラエルの民たちもいました。

世が迫及する力の争いという土俵に自ら上り、まんまと失敗します。

愛に生きるのではなく、世と同じように力に生きようと意気込んで、無に帰すという失敗をしました。

もちろん、彼らの気持ちも分からないでもありません。

シリアに、エジプトに支配され、鬱憤が溜まっていたことは十分理解できます。

しかし、彼らを選ぶべき方法は、力でもなければ、攻撃でもありません。

神の摂理に信頼することと、神の愛の実践です。

ダニエルは、これまで見てきましたように、捕囚という身分に束縛されている中であっても、それも神の摂理であり、神の導きであり、神の思し召しであるという信仰を持って、愛に生きました。

愛なき力は無に帰すということを、御言葉から教えられ、それを実践しました。

だから、ならば、私たちも愛に生きましょう。

力に生きるのではなく、愛に生きましょう。

攻撃することをもって、勝利でもない勝利を手に入れようとするのではなく、愛することをもって、完全な勝利に預らせていただきましょう。

力よりも愛するならば、そこに約束されているのは、たとえ思い通りに行かなかったとしても、主イエスにある完全な勝利であり、すべてが新しくされる栄光の望みです。

力よりも愛に生きましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ローマ書 8 : 37